

よろこび

日蓮宗 顕聖会

本山 妙顯寺

長春山 本誓寺

『よろこび』四十三 (幸福とは何かの再考)

貫首 齊藤 日軌

幸福とは何か、古来賢者が思索しているがなかなかその通りだ。と納得できた説は少ない。
ブレイズ・パスカルは『パンセ』において
「誰もが幸福になりたいと思っっている。そこに例外はない。あらゆる人間のあらゆる行為の動機である」(『パンセ』250)
幸福を定義すれば「満足することである」(『パンセ』250)
きたら、何々が手に入ったなら幸福と、幸福、満足に条件を付けてるので、先ず条件成就が難しい。
曰く「宝くじが当たって七億円入ったら、幸せ。イケメンの好きな人と若し結婚できたなら幸せ」このような物理的次元の条件でさえその成就是なかなか難しい。次に、若し七億円当たったとして、イケメンの彼氏と結婚できたとしてその幸福にいつまでも満足できるか。その状態がいつまでも続くかというところも難しい。

ここで、幸福の条件を挙げてみた。

「人生の伴侶、家族、権力、金、酒、ごちそう、賞賛、尊敬、羨望、愛される事、よい家、地位、名誉、友人」これらは、ある程度努力によって獲得できるが永続しない事が多い。お釈迦様は、これを諸行無常とおっしゃった。

ここでもう少し精神的に高次元の幸福の条件を考えてみる。与えること、相互理解、心と心の調和、共感、人を幸福にする、人に親切にする、無償の愛、魂の衝動の実現、使命の達成、魂の経験。



みおしえ

「たとえたためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのか、あるいは牛飼いが他人の牛を数えているように。かれは修行者の部類には入らない。」

「たとえたためになることを少ししか語らないにしても、理法にしたがって実践し、情欲と怒りと迷妄とを捨てて、正しく気をつけていて、心が解脱して、執著することの無い人は、修行者の部類に入る。」(法句經十九・二十中村元訳)

釈尊の教えは哲学、思想ではなく、悟りの境地に入るための方法論です。実践がともなわなければ、絵に描いた餅食べて味わうことはできません。知識は、心で理解し肉体を使って実践してみても、初めて経験知に変わりません。学校で習ったことは、人生に生かして、経験を通すと生きた知識、智慧になります。

実際に情欲と怒りと迷妄とを捨ててみて、正しく気をつけていて、心を解脱状態に置き、執著するところが無ければ、初めて空なる悟りの境地に入ります。悟りの境地を実際に体験するのです。

心の言葉

南無妙法蓮華經と唱え

煩惱を捨て、悟りを得よう

